

倭寇と

秀吉の朝鮮出兵

14から16世紀にかけて、中国の人びとの対日イメージは大きく悪化します。その原因となったのが、倭寇と秀吉の朝鮮出兵です。

倭寇とは、日本を拠点とした武装集団で、中国や朝鮮半島の沿海部を襲っては、略奪を繰り返していました。東京大学史料編纂所が所蔵する『倭寇図巻』には、月代(ちんげい)の原型)に日本刀を持った集団が、船団を組んで襲来し、略奪放火を行い、官軍に討伐されるまでの様子が生々しく描かれています。倭寇は、物だけでなく人も奪いました。『明史』によれば、1371年、当時九州一帯を治めていた南朝の懐良親王は、明からの倭寇取り締り要求に応じ、70余人もの被掠人(拉致被害者)を送還しています。

明代(1368~1644年)の白話小説集『古今小説』には、こうした被掠人の1人、楊八老の奇々な運命を描いた「楊八老越国



耳塚(鼻塚)慰霊祭



『倭寇図巻』

奇逢」という話が載っています。陝西の商人楊八老は、旅先の福建から帰郷する途中、倭寇に拉致されます。19年後、倭寇とともに中国に戻った楊八老は、官軍に捕らえられて処刑されそうになります。が、偶然再会した昔の下僕の証言で紹興府に送られ、そこで役人となっていた息子らと再会し、大団円となります。

日本の能にも、祖慶官人という被掠人をシテとする「唐船」という曲があります。船争いで拉致された祖慶官人は、日本に送られ、九州の箱崎殿の下で牛馬の野飼をしていました。妻を娶り、2人の子どもがいましたが、13年後、中国の子どもたちが父を迎えに来ます。

祖慶官人は帰国を許されますが、日本の子どもたちの同行は認められません。祖慶官人は悲しみ之余り、自ら命を絶とうとしますが、親子の情に心打たれた箱崎殿の計らいで、日本の子どもたちとともに帰国が許されます。

16世紀末には、豊臣秀吉が明の征服をめざし、朝鮮に出兵します。秀吉は、戦功の証として、明の兵士や朝鮮の人びとの鼻を削いで送るよう命じます。日本と朝鮮半島の関係史を研究する琴兼洞氏によれば、京都の東山に残る「耳塚(鼻塚)」には、10万人以上もの鼻や耳が埋められているといえます。

こうした倭寇や秀吉の朝鮮出兵により、中国の人びとの心には、野蠻で残酷という負の対日イメージが生まれてしまったのです。